

《手水舎の歴史と移設経緯》

江戸時代初期(天保 5～7 年頃)

浮世絵集『江戸名所図絵』に、随神門と拝殿の中間付近に手水舎らしき建物が描かれています。当時は柱と水盤のみの簡素な作りであったと想定されます

□**明治期の移動(明治 24～7 年頃)**

明治 24 年(1891 年)と明治 37 年(1904 年)発行の境内図には、現在の枝垂桜のあたりに手水舎が描かれています

この頃、手水盤(水槽)は文化 10 年(1813 年)製の旧水盤をそのまま用い、周囲に新たな建屋(母屋)を設けたと考えられます

□**明治 30 年の再建**

現在見られる豪華な手水舎は、明治 30 年(1897 年)に拝殿や随神門を造営した棟梁・佐藤彌一と中村長作によって設計されました

千鳥破風の屋根、および飯田家4代目・勇次郎による獅子・龍・象鼻・猿・鳳凰などの彫刻が施され、大変精巧で美しいものです

□**平成 23 年の改修と移設(2011 年)**

鎮座 1900 年を記念して改修工事が行われ、

手水舎は随神門の外側、西参道の角へ移設されました

田丸屋建設株式会社が工事を担当し、新たな水盤が奉納されました。

一方、旧水盤は所管社である国府八幡宮へ、旧随神門とともに移築保存されています